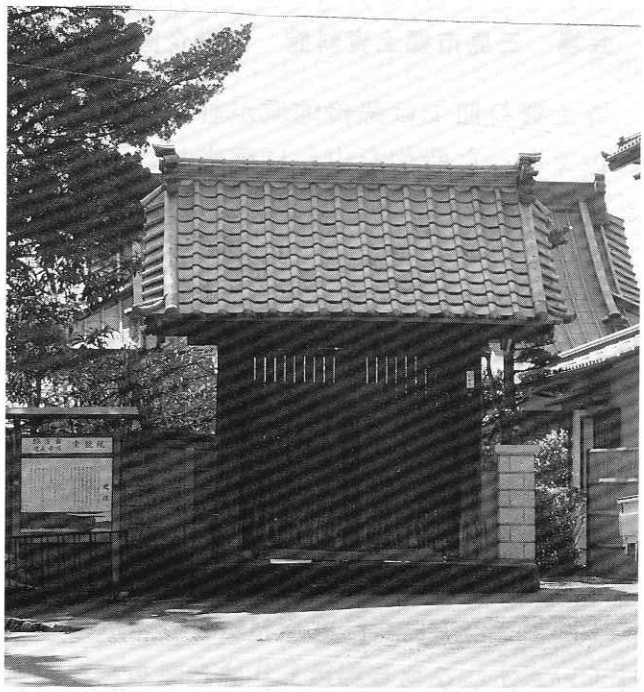
三島市　（通巻第62号）

郷土資料館だより

Vol. 21. No.1
1999. 3. 1

祐泉寺



宝鏡院

三島明神腰掛け石

三島には、現在判っているだけでも「三島明神腰掛け石」の伝説が二ヶ所にあります。

三島明神とは三嶋大社の神であり、いつの時代か海を渡って伊豆半島に着き、やがて陸路を北進し、ついに現在地を鎮座地としたと言われます。つまり三島明神の到来は「三島」という土地の名称の起源説の一つにもなっており、三島にとっては極めてゆかりの深い神ですから、その腰掛け石と言えば、重要な史跡と言えます。そこで、もう少し詳しいことが判らないものかと調べてみました。

伝説の一つは、昔、祐泉寺（大社町）にありました。伊豆地方の郷土史の原典として知られる『豆州志稿』（寛政年間、安久の秋山富南の編さん）には「松井山祐泉寺　市ケ原　相州湯本早雲寺末　寺内ニ石アリ三島明神腰掛石ト称ス　四段四畝十歩」とありますから、当時は寺内に存在していたのでしょう。現在は石は無く、昔あったこと、三島大社に移したらしいことなどが、言い伝えとなっています。祐泉寺は現在の三島大社にもほど近く、下田往還沿線に位置する寺ですから、三島明神が遷宮されてきたとき、この地に腰を下ろしたであろう事は充分うなづける伝説です。

もう一つは宝鏡院（川原ヶ谷）と、伝えられます。明治期に記された「伊豆国君沢郡川原ヶ谷村景況」の「古跡」の部に「三島明神腰掛石（中略）宝鏡院境内ニ在リ宝亀十年三島明神三島ヘ遷座ノ時コノ石ニ腰ヲ掛ラレタルモノナリト云フ竪凡貳尺五寸許目方凡百二十貫目アリ実ニ奇石（ト）称スヘキモノト見ナサレドモ前件ノ履歴故ニ現今七五三縄ヲ設ケ尊敬ヲ尽ス」と記され、年代や石の大きさ、重さなども延べるなど具体的です。現在でも「笠置石」と呼ばれて残る石がそれです　。

このように、「三島明神」という神様が腰を掛けたという、実に人間的な伝説の石が、現在の三島大社からそう遠くない周辺に二つもあって、その伝説が現在も伝えられているという事は興味を引かれることでしょう。

企画展「にしきだ村」

―錦田を守る神仏とおばあさんたち―

展示　平成11年３月21日(日)～５月16日(日)
会場　三島市郷土資料館　１階企画展示室

郷土資料館では錦田地域がむかし「錦田村」であった時代を中心に調査し、企画展「にしきだ村」において、展示するよう準備しています。

錦田地域は大場川の東側の地域で集落は箱根西麓丘陵上の坂地区と山田川、夏梅木川、大場川沿いの水田を中心とした集落に分かれています。

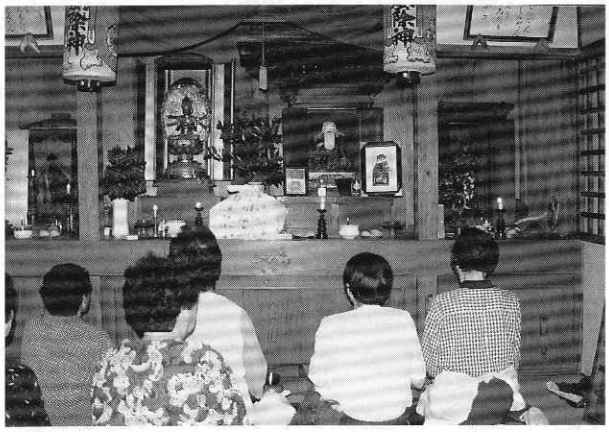
江戸時代までに成立した集落の中には古いお堂があり、集落を守る神仏として地域の中心でした。今でも地域のおばあさんたちが月に１回集まってはご詠歌やお題目の念仏をあげています。こうした集まりはおばあさんたちの社交の場でもあり、楽しみの場でもありました。子育てを終え、家の役目を子供夫婦に譲ったおばあさんにならないと、参加できない所もあります。現在こうした集まりの中心は70代80代のおばあさんたちで、その人数も少なくなりつつあります。その下の世代の人達がなかなか入ってこないので絶えてしまう恐れもあります。

長く神仏と共に錦田地域を守り続けているお堂とその縁日の様子を紹介いたします。

▲「ガキバア」像　川原ヶ谷　林光庵

①川原ヶ谷　林光庵　「ガキバアの縁日」
（毎月14日、夜６時30分～７時30分）

川原ヶ谷から国道１号線へ上る道の角に林光庵があります。ここに祀られている「ガキバア」さんは木彫りの老母の像で、風邪よけの神さんとして親しまれています。近年まで風邪をひくと近隣からおがみにきていました。昔は風邪がはやるとお札を刷って配ったといいます。



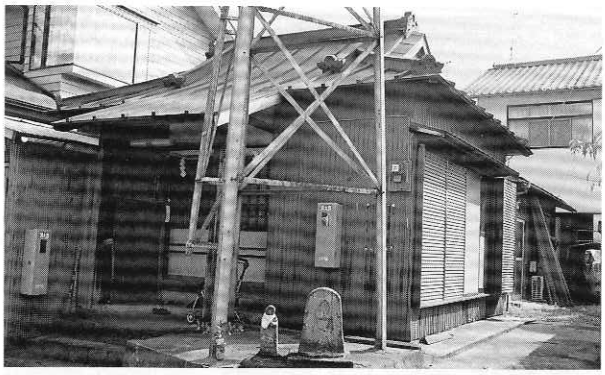
▲「ガキバア」講　川原ヶ谷　林光庵
左から　お不動さん、観音さん、「ガキバア」さん、庚申さん

縁日の夜は川原ヶ谷のおばあさん10人の他、組の当番２人の奥さんが手助けに来ます。ガキバアさんといっしょに祀っている観音さん・お不動さん・庚申さんにもそれぞれご詠歌・お念仏・観音経他をあげます。

この「ガキバア」さんは川原ヶ谷の集落を守っていて、隣の三島宿で火事があっても「ガキバア」さんが赤いおこし（腰巻）を広げて火をくい止めるので川原ヶ谷は火事にならないと信じられ、又交通量が多い所ですが「ガキバア」さんのお陰で死亡事故がないと伝えられています。「川原ヶ谷は豊かな村ではなかったけれど、ガキバアさんのお陰で穏やかに暮らしていられる」とおばあさん達は心から頼りにしている様子でした。

②御門（みかど）　帝釈堂（たいしゃく）　「帝釈さんのご縁日」
（毎月１６日、夜７時～８時頃）

御門の集落に入ると、火の見櫓（やぐら）と六地蔵に囲まれて帝釈堂があります。ここで祀られ



▲御門　帝釈堂

ている帝釈さんは白い猿の像です。

「ある時お腹の大きい猿が御門の集落に出てきた。皆で追いかけたので谷田の綿屋の木へ逃げた。その家の人が鉄砲で打って殺したところ身重（子持ち）の猿だった。この時から伝染病（チブス）がはやり、これは猿のたたりと恐れて、帝釈さんを祀り、お題目をあげるようになった。今でも綿屋のモチの木を写真にとると猿が写る。」という言い伝えが帝釈さんを祀るようになった起源で、明治頃に起こった事件だそうです。この帝釈さんは初め御門の東にある井ノ森稲荷に祀っていたものですが、昭和30年頃現在の帝釈堂を造り、遷されました。

縁日の夜には御門のおばあさん25人ぐらいと御門の当番の人２人が集まります。昔は志のある若い人や男衆も来たといいます。太鼓・うちわ太鼓を打ちながらお題目と日蓮宗の経本を30分ほど唱えます。帝釈さんの他オシャモツさん、山の神さんも祠られておりこれらの神さんに向っておばあさん達は御門が安泰であるよう願いながら唱えるといいます。終わった後はお茶とつけもので話がはずみます。帝釈さんの夜はおばあさん達の友好を深める場となっています。

▲「帝釈講」　御門　帝釈堂
左から　帝釈さん、オシャモツさん、山の神さん

この帝釈堂では他に「月並（つきなみ）」といって月初めの夜、昔からの家40軒ぐらいから集まり、お題目の標語と十三仏の掛軸を並べてお題目とお念仏をいっしょにあげています。

また、３月15日には「百万遍（ひゃくまんべん）」といっておばあさん達が大きな数珠をまわして朝から夕方まで念仏を唱える古くからの行事を行っています。

こうした信仰行事は御門に不幸・わざわいが起こらないよう、はやり病を防ぐために昔から続けられ、帝釈堂は御門のつどいの場所、心のより所となっています。

③塚原　普門庵　「お観音さん」
（毎月１７日、朝８時～昼頃）

▲「お観音さん」　塚原　普門庵

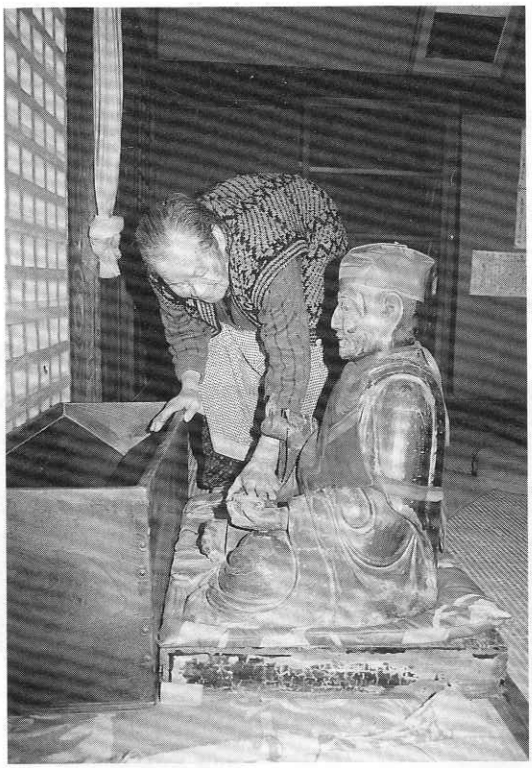
三島宿から東海道を箱根に登ると尾根上に５つの新田集落があります。一番下の集落が塚原です。街道に沿って細長く伸びる集落の中央より上の方に普門庵があります。

ここは元禄年間（江戸時代、1690年頃）鎌倉の鉄翁一牛和尚開山の寺です。和尚が本尊の観音像を背負い、京へ旅し、この地で休憩して出発しようとしたところ観音様が動かないため、この地に鎮座されたいのだろうと思い、一庵を建立されたと伝えられています。昭和の初めまで住職がいたのですが長く無住と

なっています。

定例の講日の「観音さん」の朝、塚原のおばあさん数人が集まり、お堂の内外の掃除をし、その後、鉦（かね）と木魚をたたいてお念仏や観音経他を唱えます。本尊の聖観音像の左右に不動像・毘沙門像が並び、いずれも彩色がよく残った美しい像です。

賽銭箱の前には「オビンズルサン」という木彫の老人像が座っています。オビンズルサンは体の悪い所を直すご利益があると信じられ、悪い所をさすり祈願します。塚原からお嫁にいった人達もよくお参りにきます。



おばあさん達は、お念仏の後持ち寄ったお菓子をいただきながら茶飲み話の花を咲かせています。

④谷田　淡島神社　「淡島さん縁日」
（毎月３日、夜７時～９時）

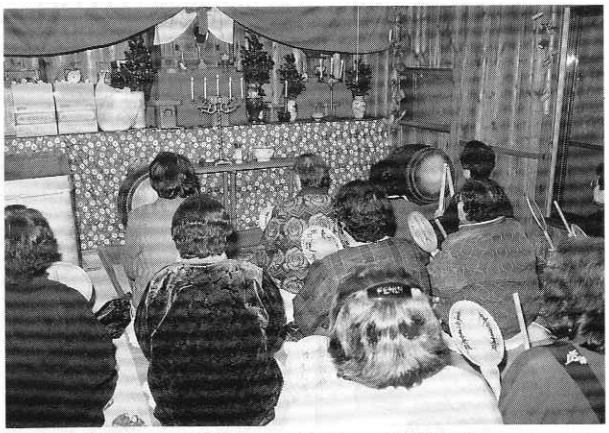
スーパー「ひのや」から南に入ると旧谷田集落の東はずれ鈴木芳光家（エーナ、ヒガシ）の前に出ます。鈴木家の敷地内、門から北へ細い道を入ると淡島神社の建物があります。

淡島さんは女の神さんと言われ、特に安産の神として信仰されました。お産の陣痛が激

▲谷田　淡島神社

しくなった時、淡島さんのローソクに火を灯すとローソクが終わるまでに無事お産が終わると信じられ、今でももらいに来る人がいます。又、底のない竹の柄杓（ひしゃく）が数十本奉納されていますが、これは水をくんでもスルッと落ちるように、お産もスルッと楽に産めると言い伝えられ、お礼に奉納した柄杓です。昭和初期以前に奉められたものです。

縁日の夜は、谷田のおばあさん達10数人と当番の家の奥さん３人（宗旨に関係なく、３軒ずつ当番がまわる）が集まります。太鼓とうちわ太鼓をたたきながらお題目とお経を約１時間唱えます。最後に病気平癒・安産等の祈願者のためにお題目などを唱えます。お題目が終わると、つけもの・茶菓子で雑談の会となります。



▲「淡島さん　縁日」　谷田　淡島神社

⑤市山（いちのやま）　地蔵堂　「お地蔵さん」

（毎月２３日、夜７時～９時）

市山は、箱根５ヶ新田の１つで、下から２番目の集落です。集落の西のはずれに地蔵堂が建てられています。お地蔵さんの日には市山のおばあさん達20～30人とおじいさん数人が集まり、お題目を上げています。この日は当番の人がおだんごを作り、お地蔵さんへ上げます。

古老の１人が「市山では、下の入口は地蔵さんが守り、上の入口は庚申さんが守る。お陰で市山には伝染病が入ったことがない」と語っていました。

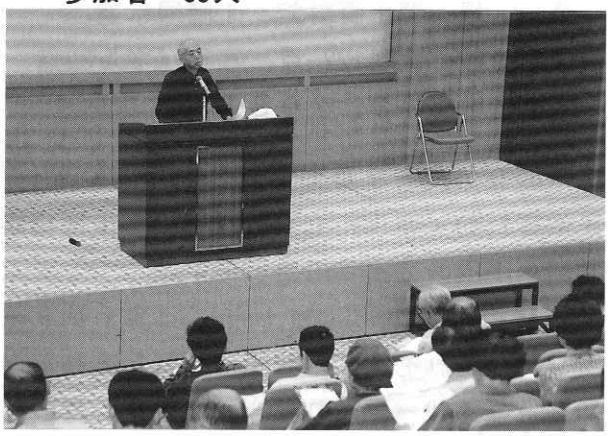
▲「お地蔵さん」　市山　地蔵堂

◇企画展講演会報告◇

演題「静岡県東部の民間信仰」11／11

講　師　日本民俗学会会員　木村博さん

参加者　65人



企画展「海・サト・山・マチの民間信仰」の関連講座を開催しました。内容は「道祖神をめぐる諸問題」ということで、三島市域でも旧村落の入り口によく見られる道祖神(サイノカミ)について、伊豆を中心にお話いただきました。

道祖神は長野、山梨、北関東など広範囲に分布する石造物で、伊豆の道祖神は、他地域のものとは形態が異なっており、その具体例を数多くあげられました。

また、道祖神は子供の守護神でもあり、子どもの願いは何でもかなえられると信じられていました。その祭りであるドンドン焼きも、かつては子どもたちが取り仕切っていたものが、大人の援助あるいは田畑の宅地化により、減りつつあることを嘆かれていました。

一方「サイノカミ」信仰の歴史は古く、イザナギ、イザナミ神話の中にすでに登場し、アノ世とコノ世の境でふせぐ神でした。このことから村の外から来る悪病等を防ぐ神として、村境・別れ道に鎮座されることが多いなど、様々な角度から道祖神についてふれられました。

ユーモアあふれる語り口で、長年の民俗調査から豊富な実例を紹介され、中身の濃い内容でした。

企画展報告
「海・サト・山・マチの民間信仰」

会　　期　平成10年10月3 日～11月15日
会　　場　郷土資料館　１階展示室
展示点数　資料122 点、写真パネル82点
入館者数　１８，７０８人

平成９年度より始まりました、沼津市歴史民俗資料館・富士市立博物館との３市博物館共同企画展の２回目の展示です。

三島市・沼津市・富士市には海・サト・山・マチそれぞれの地域で培われた素朴な信仰が数多く残っており、今回は各地の特徴ある信仰・祭を紹介しました。

三島市域では、中郷地域のオテンノウサン、佐野のヤッサ餅・リュウソウサン、川原ヶ谷のガキバア講（風邪除けの神）、芸者衆の稲荷、職人の守り神「聖徳太子」、水神講・水神さん、馬頭観音等を紹介しました。この他伊豆佐野の旧家勝俣家が所蔵していたお札から広範な信仰圏を示してみました。

これらの資料は、富士市立博物館（11月23日～平成11年１月31日）、沼津市歴史民俗資料館（平成11年２月９日～５月30日）へ巡回展示されます。

今回のパンフレットに掲載できなかった「畳職人の聖徳太子」「水神講掛軸」などを紹介いたします。

水神講掛軸

三島水車仲門で結成していた「水神講」の掛軸。箱書に「明治６年５月発起人井之上外水車仲間拾九人」と書かれています。

明治時代には、ＪＲ三島駅南の湧水量豊かな白滝公園（水泉園）や、そこから流れる河川沿いに、何台もの水車が据えられ米や雑穀を搗（つ）いていました。こうした水車所有者が動力を与え続けてくれる水の力ー水神に感謝を表した講です。

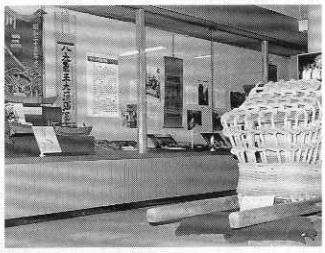
▲水神講掛軸
関守敏氏蔵

畳職人組合　聖徳太子像（木彫）

三島・沼津・伊豆長岡の畳職人が結成していた「太子講」は正月・５月・９月に催されました。その時、この聖徳太子像と「聖徳太子」と掛かれた掛軸を飾り、拝しました。聖徳太子は尺貫法を制定したと信じられ、長く職人達の守り神として信仰され続けています。右の小さな聖徳太子は三島栄町の畳職人が今でも祠っている太子さんです。

◀聖徳太子像（右）栄町　梶畳店
（左）畳職人組合

◎展示風景



手前は大場のオテンノウサン神輿（みこし）。毎年、祠を担ぎ台に独特の方法で縛りつけて神輿としています。

◎展示風景

漁民の信仰のコーナー。沼津三浦の漁師達が大漁と船の安全を祈願し、大瀬神社に奉納した幟（のぼり）など。もともとは神社へ奉納される習わしであった和船の模型や、船の航海の安全を守る船霊（ふなだま）様も展示紹介しました。

ぼくらの歴史探検（郷土教室）

郷土教室(2)　「竹細工づくり」　7／1

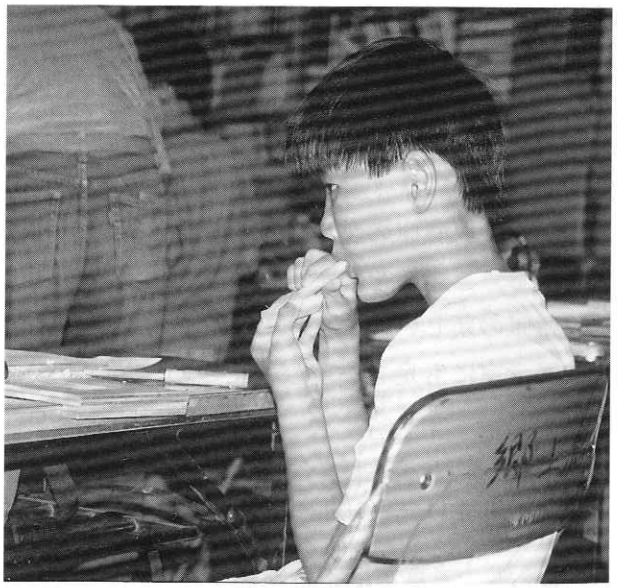
講師　竹細工玩具研究家　瀬川　到さん
参加者　13人

最初にテキストにそって、今回作る「ウグイス笛」について講師から説明がありました。

一人一人が実際にノコギリや小刀を使って、部品となる竹を加工していきます。小刀を使う様子を見ていると、今年の参加者は使った経験があまりないようで、危なげな手つきの子どもが多く見受けられました。しかし力まかせに削ろうとすることもなかったので、けがをする子もいませんでした。

自分たちで加工した部品を組み合わせ、一番音のよくでる位置を見つけると、そこを講師に接着剤で固定してもらって「ウグイス笛」の完成です。音の出る教材は思いのほか子どもたちの関心をひいたようで好評でした。

最後に全員で会場を掃除して、今日一日お世話になった講師にお礼を言って無事終了しました。



郷土教室「古代の生活を体験」11／14

講師　埋蔵文化財整理室　池谷　初恵さん
参加者８人

今回は、大昔の人たちがどんな道具を使って火を起こしたり、どんなものを食べていたのか、「一日古代人」を体験してみました。

まず、講師の池谷さんから大昔の生活のお話を聞きました。食べ物を手に入れるにはどうしたらよいか。調理のしかたにはどんな道具を使ってどんな方法があるか。そして火はどうやって起こすか、今の生活とはまったく違うので、興味津々。

そしていよいよ広場で二、三人一組で大昔の“舞ぎり方”というやり方で火を起こしてみました。思うように道具が動かなかったり、薪への燃えつきがうまくいかず、悪戦苦闘。

その後で複製された縄文土器を実際に使って、料理をしました。今日のメニューはジャガイモです。ジャガイモを土器に入れてゆでました。

そしてゆであがったジャガイモに塩をつけたり、バターをつけてほおばりました。
ちょっと土器の土の匂いがついていて、古代人になったような気分になりました。

夏休み体験「縄文土器作り」　7／22、7／24、8／20（3回）
指導　郷土資料館職員　参加者35人

夏休み恒例の「縄文土器作り」、今年度も盛況に開催されました。

一日目は「土練り」です。赤土・粘土・砂に水を混ぜ、約2時間縄文土器用の粘土を練りました。土練りをするには、腕力が必要で苦労しました。二日目は「成形」をしました。あいにくの雨のため、楽寿園の無料休憩所での作業となりました。成形し、装飾を施された土器は、いかにも縄文土器らしい細やかな文様のものにできあがりました。

三日目は「焼成」です。約1ヶ月の陰干しの後、屋外で野焼きをしました。今年は例年になく雨の日が多く、この日の前日にも雨が降ったため、火を起こすのに大変苦心しました。置き火の中に土器を据えて、再び薪で2時間燃やします。火が落ちると赤茶色の縄文土器が出来上がり、参加した子供たちは苦心して作った土器を宝物のように大事になでていました。

夏の郷土学習「水辺の歴史探訪」8／12　講師　郷土史家　秋津　亘先生　参加者　10人

昨年の夏は、街中の池や川に水がいっぱいにあふれていました。そこで夏休みの一日、川の流れを追いかけながら「水のまち」三島の歴史を訪ねました。

午前中は楽寿園から出発し、水の歴史、特に水の利用の歴史を中心に見聞しました。三島市の中心街を流れる河川の大半は、人工もしくは自然の河川に手を加えた用水路であったことから、講師より水の源とその行方、水に託された人々の思いと目的などについて、子どもたちにもわかるよう丁寧な説明がありました。楽寿園裏から広瀬橋にいたるまでの遊水路を歩いて、広瀬橋のたもとで昼食。昼休みには川に入って、カニをとったり、水辺で遊ぶ子どもたちの姿が見られました。

午後からは、水辺の史跡を中心に巡りました。予定になかった国分寺を起点に、蓮馨寺（れんけいじ）、時の鐘、バイカモの里をまわり、水の苑緑地まで、水と歩んだ三島の歴史に触れた一日でした。

▲旧菰池

お知らせ：
年始より収蔵庫の整理の都合上、3階展示室を閉じ、ご迷惑をおかけしました。ようやく収蔵庫の新しい棚に整理しました。また、3階展示室にも足をお運びください。

郷土資料館だより　No.62
平成11年（1999）3月1日発行
（年3回発行）
編　集　三島市郷土資料館
住　所　〒411-0036
三島市一番町19-3　楽寿園内
TEL　0559—71—8228
FAX　0559—81—3730
発　行　三島市教育委員会